

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	祝辞
Author(s)	夏目, 金之助
Citation	龍南會雜誌, 60: 2-3
Issue date	1897-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4919
Right	

に鑿みて湯然たり。これを鑪鑪にかけて、吹分け燒直し、貴賤大小、その器を造り、以て國家の需に應せんには、先その地がねをよくし、粗をすてんことを務とせざるべからず。刀劍に一點の穴あり、一日見ざれば、錆忽出つ。人その地金のよく、そのきたひの精ならんことを欲する。豈その故なからんや。老子云、万物の總は皆一穴より闕し、百事の根は皆一門より出づといへり。即賢材は精鍊の日本刀にして、それ始を忘れずの隙より出でん。歟。諸子これを思へよ。終に臨で、更に歌はむ。

輪奐其美、四方所瞻、勿忘其始、聖澤所霑。

明治三十年十月十日

第五高等學校長中 川 元

祝辭

本日本校創業の紀念日に當り、我等も聊か所感を述べ、併せて諸子に告げ、以て今日の祝詞とせむ。夫れ教育は建國の基礎にして、師弟の和熟は育英の大本たり。師の弟子を遇するを、路人の如く、弟子の師を視ると、秦越の如くんば、教習全く絶えて、國家の元氣沮喪せむ。諸子笈を負て、斯校に遊ぶ、必ず當に校舎を以て、晉家となすの覺悟あるべきなり。若然らず、去て放逸喧擾妄に校紀を紊亂せば、我其心と學校との間、白

雲千里なるを見る而已。夫れ天人一體自他無別と言へり。斯くならでは、學校の隆盛は期しがたきぞかし。されば此紀念日も、往し昔の忘形見にして、一日の歡樂を盡すも、益此の校を光大にして、聖恩に報い奉らんとて也。況んや、今日は國家笈々の時なり。濫費の日に多きは、内憂なり。強國の隙を窺ふは、外患なり。思て茲に至れば、寢食も安からぬとなり。殊に薄志弱行の徒は、人の色を見て移り、利の多きを聞て走る。恰浮草の如し。豈浩歎の限ならずや。諸子能々此に眼を着け、規則遵奉、校友相和し、孜々として學を勉めば、唯本校の面目なるのみならず。亦國家の幸福なり。諸子今學生なりと雖も、其一言一動は即國家の全局に影響するなり。佐久間象山、我四十にして世身の天下に關することを知るといへり。象山の人傑にして、始て然るにわらず。中等の人士も然り。下等の匹夫匹婦も亦然り。即ち學校一致の觀念なきは、其校全体の破綻にして、亦國家教育の陵夷なり。懼て且戒めざるべきんや。是を靦規とす。諸子之を諒せよ。

明治三十年十月十日

第五高等學校教員總代

教授 夏目金之助